

紀要

■『紀要』刊行30周年記念号

- 縄文時代初頭の移動とルートについて…………… 重田 勉 (1)
- 近江地域のカマド形土器
—渡来系集団の動向把握にむけて— …………… 辻川 哲朗 (6)
- 出土文字資料に近江古代史を求めて
—付表「滋賀県下の発掘調査で検出した地震跡」— …………… 濱 修 (18)
- 正倉院文書に見える三雲寺の所在地について…………… 小松 葉子 (26)
- 奈良時代の地域開発と神社本殿
—蒲生野・金貝遺跡の調査成果から— …………… 中村 智孝 (39)
- 近江における瓦器の基礎的研究…………… 堀 真人 (50)
- 安土城の空間特性 —安土城は神社だ— …………… 大沼 芳幸 (67)
- 高島郡における山城の築城画期 …………… 小林 裕季 (75)
- 将棋史研究ノート8 —歩兵の存在感— …………… 三宅 弘 (84)
- 研究ノート 近代化の痕跡
—彦根市松原内湖遺跡の鉄道遺構・遺物— …………… 小島 孝修 (89)
- 琵琶湖地域における人と森の相互関係史の解明に向けて
—滋賀県の遺跡における古生態学データの集成— ……………
林 竜馬・佐々木 尚子・瀬口 真司 (97)

30

将棋史研究ノート8

—歩兵の存在感—

三宅 弘

1. はじめに

日本の将棋を知る人々の中では、一般的に歩兵は最も価値の低い、扱いの軽い駒として認識されている。対局に際しては、最初に動く駒であり、開戦時に「突き捨て」つまり歩兵を相手の歩兵に取らせ、その駒が動くことによって生じた間隙を目標に攻めていくための作戦において使用されることが多い。その場合、戦いにおいては兵士から放たれる矢に例えられるかも知れない。言い換えれば使い捨てにされる可能性の高い駒である。

古代の軍隊においては、奈良時代には、大穀以下五段階の隊長に率いられた千人を持って軍団としている⁽¹⁾。歩兵はその中で弓馬を操る騎兵隊とは別の隊に歩兵隊として存在し、五番目の分隊長クラスにあたる隊正^{たいしょう}に率いられた20人が最小の部隊となる。当然のことながら、歩兵が軍団の中では最大の員数を誇る存在であり、攻防に貢献する役割を負っている。攻めにおいては楯を前面に押し出して軍全体を前進させる一員であり、守りにおいては敵の矢を防ぐ存在である。

このように、歩兵とは個としては存在感が薄いものであるが、集団となっては大きな力を発揮する。将棋の歩兵も単体の駒としては扱いが軽く見られがちであるが、多数になると威力を発揮する機会が多い。歩兵に係る格言も軽く扱われがちな存在を払拭するような場合が結構多い。以下、いくつかの格言を例に挙げてみる。

- ① 「三步持ったら端に手あり」
- ② 「三步あつたら継ぎ歩に垂れ歩」
- ③ 「二枚換えなら歩ともせよ」
- ④ 「歩のない将棋は負け将棋」
- ⑤ 「歩切れの香は角以上」
- ⑥ 「一步千金」
- ⑦ 「五三のと金に負けなし」
- ⑧ 「虻のと金」
- ⑨ 「焦点の歩に好手あり」
- ⑩ 「手のないときは端歩を突け」
- ⑪ 「と金のおそはや」
- ⑫ 「金底の歩岩より固し」
- ⑬ 「と金は引いて使え」
- ⑭ 「戦いは歩の突き捨てから」
- ⑮ 「飛車先の歩交換三つの得あり」
- ⑯ 「桂の高跳び歩のえじき」

以上、主なものを掲げたが、これらを歩兵の特徴によって大別すると、

- A 数量の問題……………①②③④⑤
- B 交換価値の高さ……………④⑤⑥⑦⑧⑨
- C 戦いの方(戦術) ……………⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯

以上のように分けられるものと思われる。これらの解釈は、

A 歩兵の数が他の駒に比べて格段に多いということである。歩兵は盤上に18枚存在することから、比較的容易に取り込める(奪える)駒と考えられている。そのため、戦い方によってはそれを惜しげもなく使うことができるということである。つまり、相手方から奪い多量に戦場(盤上)に投入することが出来る駒である。①②③はその意味で、また④⑤は逆の意味で言い表している⁽²⁾。

B もともと歩兵が価値の低い駒であり、味方の歩兵と相手方のどんな駒と交換しても大きな利益(駒得=こまどく)になる、ということの意味する。故に⑥(一步千金)なのである。特に⑤は香車の直射を防ぐ歩兵がないため、香車と上位の駒とを交換せざるを得ないことを意味する。また、⑦⑧は成駒のと金なので、金将の働きをしていたものが取られたら歩兵に戻るため、他の駒との交換は相手に大きなダメージを与えられる。

C 将棋の戦術面に触れた項目であるが、突き詰めれば上記の格言は全てここにあてはまるものと考えられる。歩兵が自陣の最先端(相手寄り)に位置しており、この駒を動かすか乗り越えない限り敵味方のどの駒も相手方へ攻め込めないというルールである。すなわち、戦いに際してはこの駒を動かすことから始まる。攻防における楯的な存在であり、それを突破するためには歩兵どうしがぶつかることになる。戦いが始まれば⑭⑮、勝負のポイントには⑨、守っては⑫⑬など歩兵は八面六臂の活躍を見せている。

歩兵駒は1枚の価値から見れば低いものの、枚数が多いこと及び「と金」としての活躍度は高く、相手の駒との交換を考えた場合、最も格差の高い駒になりうるということである。すなわち、と金(=金将)として使用していた駒が相手に渡った瞬間に歩兵としてしか使用できないことへの価値の差は大変大きいものと言える⁽³⁾。

2. 「将棋」ゲームとしての歩兵の役割

諸外国の「歩兵」相当の駒においては、朝鮮将棋以外は基本的には前に1マス動けるのみで、日本の歩兵と同じ動きである⁽⁴⁾。ただし、相手の駒を取る場合において斜め前に1マス動くことが出来る(とい言うより斜め前の駒し

か取れない) 点において、日本の歩兵と異なる動きをする「歩兵」がいくつか(中国・朝鮮・チェスなど)存在する⁽⁶⁾。

因みに、日本の歩兵と異なる動きをする諸外国の「歩兵」が相手の駒を取ったとき、同じ縦の線上に「歩兵」の駒が2枚並ぶ場合が生じる。日本の場合は後世に「二歩」という禁じ手になったため、あまり意識されないようであるが、諸外国では同じ縦線上に「歩兵」駒が並ぶのはゲームの進行上起こりうることである。この場合、違反ではないがチェスなどでは先頭の「歩兵」の前には効きがないことになり、守りが弱くなるため不利と考えられている。

日本将棋の歩兵は前に1マス進むのみで、相手の駒を取る時も同じである。駒の動きから考えると最も弱い機能を保持していると考えられる。日本の歩兵が伝来当初の最も弱い機能のままで現在までであることは、日本将棋が諸外国の「将棋」と比べて、その後の特殊な変化(駒の再利用・成り駒の多発・駒の機能の縮小など)を遂げたことと関係があるものと考えられる⁽⁶⁾。

特殊な変化を考える前に、日本将棋における歩兵の役割を考えてみたい。歩兵駒の特徴をまとめると、

- ・進むときも相手の駒を取るときも前に1マスしか進むことが出来ない。
- ・片方の盤面に横1列、9枚分の駒が並んでいる。(両方で18枚)
- ・数が多いこともあって、1枚の価値がほかの駒と比べて低く考えられている。
- ・敵陣に成り込むと「金将」と同じ働きをする「と金」になる。

以上である。

駒の動きが弱く、ゲーム開始当初は横1列に並んでいる状態は、ほこを持ち整然と楯を並べて進む歩兵を想像させる⁽⁷⁾。その姿は相手方の攻撃を防ぎながら間合いを詰め、相手陣に乱れが生じれば一気に騎馬隊が襲いかかることのできる、攻防に秀でた役割をも併せ持つ。また、価値の低い駒であるという考えから一部分が破られてもさほど大きな痛手には至らず⁽⁸⁾、価値のある駒との交換ともなれば相手方に大きなダメージを与えることとなる。歩兵が相手陣内に到達して「と金」になれば、その威力は6倍となる。

歩兵の特徴から以上のことが考えられる。歩兵の果たす役割は、一つは味方の駒を守る楯としての機能がある。お互いに歩兵がない場合には、鎧を着用していない状態で刀を突き付けあった状況であり、非常に危険である。それを歩兵が緩和していると考えられる。

もう一つは上記の裏返しであるが、相手方への速攻を防ぐという役割が考えられる。大きく動く駒の少ない平安時代の将棋でも両端に位置する香車などは、相手方の駒にまで駒の効きが及ぶため、一手で相手の香車駒を取った上に成り駒が誕生する。香車の成り駒も金将相当であるから、

敵陣では大きな活躍が期待できる。従って、いきなり駒の取り合いが起こるということは、ゲームは一気に終盤へなだれ込むということを意味しており、すぐに終了してしまうことにつながる。これは、先に攻める方が圧倒的に有利であると言え、ゲームとしての興味が著しく阻害されると考えられる⁽⁹⁾。例えば、中国・朝鮮将棋の砲(包・砲)のように敵味方の駒を1つ飛び越えて相手の駒を取ることが出来る駒は、その前に「歩兵」の駒を置かないようなシステム(ルール)になっている⁽¹⁰⁾。現在の日本将棋でも、飛車・角行・香車の前には飛び出さないように歩兵が蓋をしているため、戦いの始まりは歩兵を1コマ進めることから始まる。

平安時代において飛車・角行がない状態での日本の将棋駒の中で、一度に長距離を移動する駒は香車以外には存在しない。ただし、この駒は前にしか動けないので、成らない限り進み切った後には脅威はなくなる。

3. 歩兵駒の出土した遺跡

歩兵駒は、1つのゲームにおいて使用枚数が他の駒に比べて格段に多い。王将・玉将は2枚、その他の駒は4枚であるのに比べて、歩兵は18枚である。歩兵駒の出土した遺跡は、私が確認している範囲では全国で35遺跡を数え、出土枚数は132枚にのぼる。当たり前であるが、この数字は他の駒の出土数を大きく上回り、他の駒の2.5~3.5倍に相当する。1ゲームの使用枚数は王将を除く他の駒の4.5倍であるので、出土数的にはやや少ないくらいはあるが、概ねこんなものであろう。

一覧表(表1)を見ると、平安時代の駒は16枚であるが、それらは全て近畿地方か東北地方に片寄っている。遺跡の性格も寺院か宮跡・国府などの公的な機関に限られていることがわかる。出土した遺跡を順に見ていくと、興福寺旧境内遺跡は南都六宗の一つ法相宗の寺院で、藤原氏の氏寺である興福寺の境内に位置する(奈良県立橿原考古学研究所1994)。日高(深田)遺跡は古代但馬の中心地であった推定但馬国府跡と考えられている(小泉1987)。酒田城輪遺跡は城輪柵と称され、中央政府の蝦夷地支配の拠点である出羽国府所在地の有力候補である(小泉1987)。鳥羽離宮跡は平安京の南に位置し、12世紀から14世紀にかけて代々の上皇が住んでいた院御所である(吉崎・鈴木1983)。中尊寺境内遺跡は、奥州藤原氏初代清衡が建立した中尊寺の境内にあり、金剛院の本堂や庫裏の建て替えによって調査された遺跡である(木簡学会1995)。柳の御所遺跡は奥州を支配した平泉藤原氏の初代清衡、二代基衡の居館跡および政庁跡とされている(木簡学会1991・2013)。上清滝遺跡は奈良から清滝峠を越えて西に向かう清滝街道に沿った大阪府四條畷市にある集落遺跡であるが、調査地には「塔の坊」という字名が伝えられており、近年寺院関連の遺跡であると言われている(四條畷市史編さん委員会

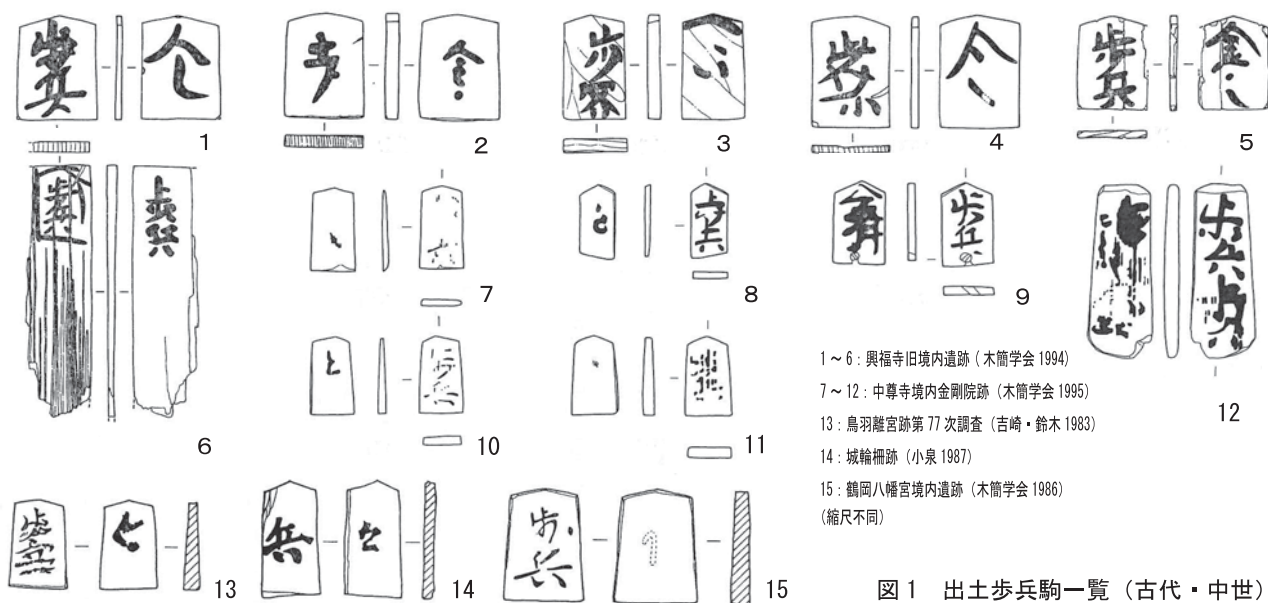


図1 出土歩兵駒一覧 (古代・中世)

表1 歩兵駒の出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	時期	枚数	備考
1 興福寺旧境内	奈良県	天喜六(1058)年	5	「酔象・金将・歩兵」と「歩兵」の書かれた墨書木札 天喜六年銘木簡と共伴
2 深田(日高遺跡)	兵庫県	1094~96年	1	
3 興福寺旧境内	奈良県	承德二(1098)年	1	酔象駒と共伴
4 酒田城輪	山形県	平安後期	1	「口兵」
5 鳥羽離宮跡77次	京都府	平安後期	1	
6 中尊寺境内金剛院	岩手県	12c前葉	5	「歩兵・歩兵」の書かれた墨書木札 下面の黒褐色 土層出土
7 柳之御所23次	岩手県	12c後半頃	1	園地跡SG1出土
8 上清滝	大阪府	寿永三(1184)年	1	旧河川埋土出土(落込み状遺構?) 寿永三年銘 木簡と共伴
9 中島田	徳島県	13c後半~14c前半	1	集落内区画溝出土
10 新安沖海底船	韓国	1323頃	3	東福寺が消失した寺院の造営のために派遣した貿易 船
11 鶴岡八幡宮境内 研修道場用地遺跡	神奈川県	13中~15中	2	
12 観音寺城下町	滋賀県	16c中頃	4	
13 一乗谷朝倉氏館	福井県	1567年下限	63	
14 一乗谷朝倉氏館(84次)	福井県	1567年下限	1	溜樹脇焼土層
15 清洲城下町	愛知県	15c末~17c初	1	
16 駿府城三ノ丸	静岡県	16c前半~17c前半	1	
17 願海寺城跡	富山県	戦国時代	1	城南端の内堀
18 大坂城	大阪府	16c頃	1	
19 疋田城	福井県	16c頃	1	
20 延暦寺	滋賀県	16c後半~17c前半	3	木活字転用駒
21 大坂城	大阪府	16c末~17c初	2	歩兵(黒漆)は土坑482 漆書の駒は水無瀬駒か?
22 仙台城本丸跡	宮城県	元和二(1616)年頃	1	材はスギ
23 大坂城下町	大阪府	江戸初期	1	
24 平安京御土居	京都府	1654年~75年	2	
25 港区愛宕下遺跡 No.149遺跡	東京都	17世紀(近世)	1	
26 後楽二丁目南遺跡	東京都	17c後~18c前	1	土坑出土
27 山吹町	東京都	18c第1四半~19c第1四半	2	
28 大坂城跡	大阪府	18c中頃	2	
29 溜池	東京都	江戸後期(宝暦9年1759以降か?)	1	大名屋敷跡
30 町	群馬県	天明3(1783)年以前	1	礎石建ち大型建物出土・桂馬はトチノキ材
31 黒崎城跡(七区)	福岡県	18c後半	1	水田跡出土(天保11年{1840}大火の廃材投棄場 に使用)
32 尾張藩上屋敷(第44地点)	東京都	18中~後・18後~19中	1	
33 高槻城三ノ丸	大阪府	18c末~19c初	13	
34 久昌寺	石川県	18c末~19c初	4	96号方形木棺墓出土
35 池之端七軒町	東京都	江戸	1	368号遺構(長方形木棺墓)
合計			132	

2016)。

このように、平安時代以前においては、歩兵駒の出土する遺跡については、見事なまでの偏りを見せている。しかも、それらは天皇（上皇）の別邸や国府などの国の機関、有力寺院などがほとんどであり、当時の将棋が庶民の手の届かない場所で行われていたことを類推する手がかりとなることは間違いない。

また、鎌倉・室町時代の歩兵駒についても若干紹介すれば、新安沖沈船は韓国新安沖に沈んだ船から発見された日本将棋の駒であり、焼失した東福寺の寺院の再興のために派遣された船が嵐で沈んだものである（小泉信吾1987）。また、鶴岡八幡宮境内研修道場用地遺跡は、武家の崇敬を集め鎌倉幕府からも厚い庇護を受けた神社である（木簡学会1986）。それに対して、唯一集落からの出土と考えられるのが、中島田遺跡である。（木簡学会1993）この遺跡は阿波国府の北東約3kmに位置し、「平安時代に成立起源をもつ安楽寿院領名東荘」の荘園内の低地で確認された遺跡と言われている（徳島県教育委員会1989）。

以上、鎌倉・室町時代の歩兵駒出土遺跡を見ても多くが寺社関係の場所から確認されているところは、平安時代の出土の傾向とほとんど差がない。

4. まとめ

これまで述べてきた歩兵駒の特徴は、数が多い・交換価値が高い・敵陣に成り込んだ時の威力が大きい・いきなり戦いが始まらないように防御をする、などである。数の多さは駒一つ一つの価値そのものを弱めているが、集団で敵に対するときには相当な威力が生じる。また、強い駒と刺し違えた時の相手方のダメージは大きくなる。動きの弱い歩兵駒が成った「と金」は、金将の働きをするわけであるから、その働きは6倍に跳ね上がる。しかも敵陣での「と金」は敵の王に近いところにおり、与える脅威はその数倍に膨れ上がるものと考えられる。

しかし、歩兵の最も大きな役割は味方の駒の楯になりきるところにあるのではないかと考えられる。源平時代の例であるが楯を装備した歩兵隊が前線に並列し、その後ろに馬に乗って弓を持った騎馬隊が控えた形をとるのが戦いの基本であった。（笹間2000 204頁）そして、両者が矢の届く距離まで間を詰め互いに矢を射かけあった後、どちらかの陣に生じた乱れを突くように騎馬隊が突進していく戦法であった。（笹間2000 204頁 上杉2007 243頁）

このような戦い方は、現在行われている将棋の戦い方（駒の進め方）によく似ている。平安時代の将棋の戦い方は残念ながら判明していないが、将棋というゲームが伝来当時の実際の戦闘に擬したものであったと考えるならば、同じような動きをしていたと考えて差し支えないものと思われる⁽¹¹⁾。

歩兵は動きの小さな駒であり、力のない駒である。けれ

ども数の多さと敵陣に成り込んだ後の威力は、他の駒の追隨を許さないものがある。戦いは、いつの時代も「数の論理」がものを言う。歩兵駒は将棋の中では最も数の多い駒であるゆえに、ゲームにおいては集団で敵の攻撃を防ぎ、敵の駒と刺し違えて味方の駒を守るといふ、動きの弱い駒ならではの戦い方をしていると考えられる。

註

- (1) 職員令軍団条や軍防令軍団大毅条によれば、大毅（軍団の長官）をはじめとする軍団の各部隊長クラスに率られる兵士にあたる。（井上ほか1976 319頁）奈良時代の軍団には、弓馬に秀でた騎兵隊とそれ以外の歩兵隊に分けられ、それらをまとめて兵士と称している。
- (2) ただし、この格言は現在の将棋に関してのものであり、駒が取り捨てであった伝来当初のルールでは、Bの意味は半分に減じることは明白であり、ACも解釈は変わるものと思われる。
- (3) 駒の再利用がなかった平安将棋でも、味方の歩兵で相手方の金将や銀将と刺し違えることは、相手方に大きなダメージを与えられるものと考えられる。
- (4) ここでは便宜上、チャトランガ・象棋・チェスなど諸外国の将棋を「将棋」、日本将棋の歩兵に相当する駒を「歩兵」と表現する。
- (5) 将棋が発生したインドからタイ・中国・朝鮮・チェスなどの主な将棋の「歩兵」に相当する駒を比べてみれば、ほとんどの駒が前方に1つ進むか駒を取るときに斜め前方に1つ進むのみで、大きな違いは見られない。
- (6) 将棋の日本伝来が平安時代後期（11世紀中頃）をそれほど遡らないと考えられることは、8世紀の正倉院宝物や10世紀前半の『延喜式』に記載されないことから理解できる。（清水2014 52頁～53頁）とすれば、早くても10世紀中頃以降の伝来が考えられるわけであり、ここから約100年でルールが大きく変わることは考えにくい。成り駒の多発は駒の機能の縮小によって引き起こされたものと考えられるので、11世中頃時点でこの両者が成立していることを考えると、もともと駒の機能の低い「将棋」が伝わっていた可能性も捨て難い。古代における諸外国の「将棋」の状況が不明確である現在、日本に伝えられた「将棋」が動きの弱い駒を使用しており、その後動きの強い現在のような「将棋」に変化した可能性も考えられる。
- 余談であるが、駒の再利用が当初から行われなかった理由は、伝えられた「将棋」のルールがそうであったことにもよるが、日本古代の戦闘が「どちらかの首を取ることに最終的な決着を求めていたことにもよる。（近藤1997 98頁）いわば死ぬか生きるかの壊滅戦であったことも大きく影響していると考えられる。
- (7) テレビ等で通常見られるヤリは南北朝期に登場した鑓であり、古代における「槍」は「ほこ」と呼称される。（近藤 2005）
- (8) もちろん現在の将棋では、たとえ歩兵1枚でも貴重な駒であ

り、取られれば大きな戦力の低下に繋がることになることは言うまでもない。

- (9) 現在の将棋でも、先に攻める先手の方がやや有利であると勝敗のデータから導き出されている。
- (10) 現在、中国・朝鮮将棋の「歩兵」の駒は端から奇数列に置かれ、偶数列の砲（包・砲）の前には「歩兵」は置かれていない。砲（包・砲）の駒は、伝来当初の中国将棋には存在しない駒であったといわれており、その当時の「歩兵」駒の並びや個数は現在と違っていたものと考えられる。
- (11) 奈良時代の軍団制は平安時代に至る前に廃止されるが、健児制によって兵力が補われた。中世の源平の合戦では、徒歩の兵士が戦闘員を補助する役割を担うようになり、徒歩の兵士が補助戦闘員となったこと以外は、騎馬による戦闘が繰り返されていたと考えられる。従って、平安時代においても同様の戦い方が行われていた可能性が考えられる。（笹間2000 38頁）

関東の例であるが、平将門の乱の顛末を記した『将門記』では、将門の一族郎党に用いられた将門直属の戦闘員である従類（騎馬部隊）と、領民からの協力者や徴発された戦闘員である伴類（歩兵部隊）という言葉が用いられていた。伴類は寄せ集めの兵であるので、味方の形成が悪くなると一気に逃げ散ってしまうような集団であった。従って、この時代の関東では、直属の戦闘員である従類のみが騎馬によって戦っていたとされる。（笹間2000 34頁）

告書』

- 二見町教育委員会(2004)『安養寺跡豆石山中世墓群豆石山経塚群五峰山2号墳』
- 増川宏一(1977)『将棋Ⅰ』（ものと人間の文化史23）、法政大学出版
- 増川宏一(2013)『将棋の歴史』（平凡社新書670）、平凡社
- 三宅 弘(2013)「将棋史研究ノート6—銀将の存在—」『紀要』26、公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 三宅 弘(2016)「将棋史研究ノート7—桂馬と香車の動きと性格—」『紀要』29、公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 木簡学会(1986)『木簡研究』第8号
- 木簡学会(1990)『木簡研究』第12号
- 木簡学会(1991)『木簡研究』第13号
- 木簡学会(1993)『木簡研究』第15号
- 木簡学会(1994)『木簡研究』第16号
- 木簡学会(1995)『木簡研究』第17号
- 木簡学会(2013)『木簡研究』第35号
- 吉崎伸・鈴木廣司(1984)「IV鳥羽離宮跡」29 第77次調査『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 徳島県教育委員会(1989)『中島田遺跡南島田遺跡』（県道徳島鴨島線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）

(みやけ ひろし：滋賀県埋蔵文化財センター主任技師)

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 井上光貞・関晃・土田直鎮・青木和夫(1976)『律令』（日本思想史体系）、岩波書店
- 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1991)『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』（平成2年度分）
- 上杉和彦(2007)『源平の争乱』（戦争の日本史6）吉川弘文館
- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所(1984)『増補改編 鳥羽離宮跡1984』
- 小泉信吾(1987)「駒の出土例とその意義」『京都府埋蔵文化財論集』（第1集—創立5周年記念誌—）、財団法人京都市埋蔵文化財調査研究センター
- 国書刊行会(1903)『二中歴』史籍集覧
- 近藤好和(1997)『弓矢と刀剣』、吉川弘文館
- 近藤好和(2005)『騎兵と歩兵の中世史』、吉川弘文館
- 笹間良彦(2000)『図説 日本戦陣作法事典』、柏書房
- 四条畷市史編さん委員会(2016)『四条畷市史』（第5巻 考古編）
- 清水康二(1998)「古式象棋と将棋の伝来」『月刊考古学ジャーナル』3月号 No.428、ニューサイエンス社
- 清水康二(2014)「『庶民の遊戯である将棋』考—将棋伝来問題の定説化を目指して—」『考古学論攷』（橿原考古学研究所紀要第37冊）、奈良県立橿原考古学研究所
- 奈良県立橿原考古学研究所(1994)『興福寺旧境内発掘調査概報』
- 平泉町教育委員会(1995)『特別史跡中尊寺境内金剛院発掘調査報

【編集後記】

当協会は、〈文化財をとおして地域に力強く貢献していくこと〉を組織の使命に掲げ、その基盤となる調査・研究能力を向上させ、その蓄積を形にしていくための場として『紀要』を位置づけてきました。今回、ここに30個目の結晶をお届けいたします。

本号では、縄文・古墳に関わる諸問題のほか、古代の地域の開発、瓦器の基礎的研究、戦国の城の位置づけ、さらには将棋や鉄道にまつわる歴史、人と森との関係史などが検討され、調査の過程で生まれた多様な課題に取り組む職員・関係者の姿を反映させるものとなりました。

地域と関係機関の協力の下に実施できた調査成果を適正に活かすため、更なる研鑽に励んで参ります。今後も皆様のご批判とご教導をあらためてお願いいたします。 (S. S)

紀要 第30号

刊行年月日：平成29年（2017）3月31日

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 / (fax) 077-543-1525

(e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：三星商事印刷株式会社